

園番号 716

令和6年度 奈良市立東登美ヶ丘こども園研究実践概要

園長名 辻 里香
全園児数 83名

1. 研究主題

見て 聞いて 感じる力を育てる
～心も体も弾ませよう～

2. 研究年度

2年度

3. 研究主題設定理由

初年度の研究では、子どもの心や体が弾む体験ができることを目標に日々保育に取り組んできた。2年度も引き続き、築かれた信頼関係の中で、身近な人や物との関わりを通して刺激を受け合うことによって、「やってみたい」「もっとしたい」と心が動く体験を積み重ね、子どもが主体的に活動し、見る力・聞く力・感じる力を育ていけるように主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

ひと・もの・こととのかかわりの中で、子どもの心や体が弾んだ体験をした時の、保育者の援助や環境構成を探る。

②研究の重点

- ・研究主題について職員間で共通理解をし、具体的な取り組みについて理解を深める。
- ・子どもが遊びや生活をする中で「見る力・聞く力・感じる力」が育つための保育者の援助や環境構成について考え、継続的に育ちを見ていく。

③活動の方法

- ・各クラスの事例を出し合い、子どもの心が弾んだ瞬間や、その時の保育者の援助や環境構成を探る。

子どもの好奇心、探求心を引き出す援助や環境構成

「やってみたい」「もっとしたい」

<マンボジンベタツ> 3歳児 11月

秋の遠足で海遊館に行くので海の生き物に興味をもってほしいと思い、マンボウ、ジンベエザメ、タツノオトシゴの真似をする「マンボジンベタツ」というダンスを踊ることにした。初めて踊る時に、子どもたちが生き物の真似をすることを楽しめるように、保育者も全力でダンスを楽しんだ。ダンスは簡単な振り付けだったので、子どもたちはすぐに覚えて繰り返し踊り、とても楽しそうにしていた。そして次の日には、ダンスに出てくる生き物がどんなものかわかるように、写真も掲示しておいた。

遠足当日は、「わぁ～、すごい！」と大きな水槽に張り付いて様々な生き物を見たり、「シュモクザメもいるよ」と知っている生き物を見つけて保育者に知らせたりしていた。また、ダンスに出てくるジンベエザメやマンボウを見つ

けると、ゆっくり泳ぐ姿を目で追いながら、「どんな風に泳ぐんだったかな？」という保育者の



声かけで、水槽の前で大きな口を開けたり、頬を両手で挟んだりして真似することを楽しんで

ていた。

遠足以降、クラスでダンスをする時は「マンボウがいい」というリクエストが多くあり、ダンスコーナーで音楽が鳴り始めると、たくさん子どもたちがステージにやってきて、生き物の真似をしながら友達同士で笑いあって楽しんでた。今まで体操やダンスをすることが苦手で、友達の様子を見ていることが多かった子どももいたが、本物を見たり、繰り返し友達と一緒に真似をしたりした



ことで、ダンスコーナーでも踊ってみようという気持ちが芽生え、友達と関わりながらいきいきと体を動かして遊ぶことを楽しむようになった。

<考察>

- ・海の生き物が出てくるダンスを保育に取り入れたことで、遠足で出会う生き物に興味をもち楽しんで観察する姿につながった。
- ・保育者が全力で一緒に踊ったり、繰り返しクラスみんなで踊る時間を設けたりしたことで、今までダンスをすると見ていることが多かった子どもも、やってみたいと思うきっかけになり、保育者や友達と楽しみながら体を動かすことができたと思われる。

<き～まった！！> 4歳児 2月

年度初めは姿勢を保てず椅子から崩れ落ちることが多かった。集中して話を聞く時間が少なかったので、体づくり遊びに取り組んだり、“聞く姿勢”を意識できるよう繰り返し声をかけたりしてきた。話し合う経験を何度も取り組んできたグループの名前決めでの話し合い。次々と、名前が決まっていく中で曇った表情をしているグループがあった。

A児「話し合いしたくない」とうつぶんでいたのが保育者が理由を尋ねると「皆がAの話を聞いて「いいね」って言ってくれないから嫌！」と話した。するとA児の様子を察していたB児が「だってAが皆の話に嫌だってばかり言うから…」と声を小さくしながら言った。そこで保育者は「誰でも嫌だって言われるのは悲しいよね、でも嫌な気持ちには理由があるから、「どうして嫌なの？」って聞いてみたらいいんじゃない？」とやり取りの仕方を伝えてみた。保育者は思いを伝え合ってほしいと考え、あえてその場から離れて見守ることにした。すると下を向いていたB児が顔をあげ、「どうして嫌だったの？何がいいの？」と友達に理由を尋ね始めた。A児「嫌って言われるから嫌だった」C児「前も譲ったから今日は(譲るのが)嫌！」D児「絶対にチョコを入れたいから(今の名前は)嫌だ」とそれぞれの思いを話していく中で、E児が「嫌なことはないけどパンケーキがいい」とゆっくりと話した。

沈黙の後、A児「チョコもつける？」C、D児「めっちゃいいやん！」と顔を見合わせて頷き、B児「それならチョコパンケーキでいいんじゃない?!」と立ち上り「それいいじゃ～ん！」と皆で喜んだ。そして声を揃えて「き～まった!!」と保育者を呼んだ。



<考察>

体を支える力や踏ん張る力を意識した遊びを取り入れてきたことや、話を聞く姿勢を意識できるような声掛けなど日々の積み重ねが今回の友達の話聞く姿につながった。また「嫌だ」という気持ちに理由があることを知ったり、その思いを受け止め折り合いをつけた

りしながら、自分たちで話を進めたことで達成感を味わえた。聞く力や姿勢が育つと、友達と話し合いを通じて関わりを深めることができ、互いを認め合える子どもの姿につながると思われる。

〈もっとむずかしくしたい〉5歳児5月

3歳児保育室前に設定された円形やS字の低い平均台のバランスコースに興味をもち、一緒に遊び始めたA児とB児だったが、あっという間に渡ってしまうと、A児「めっちゃ簡単や」B児「簡単すぎるなあ」と言い合っていた。保育者は、別の場所で5歳児が思いきり身体を動かせる運動遊びができたらと思い「もっと難しい自分たちだけのコースをつくってみたらどう？」と提案すると、A児「そうしよう！つくってみたい」B児「もっと難しいコースやってみたい」ということだったので、保育者も一緒にいろいろな運動用具を探しに行くことにした。

興味をもった他の子どもたちも一緒に平均台や巧技台、マット、はしごを自分たちの保育室前に運び、「めっちゃ難しいコースにしような」と言いながら並べて置いた。最初は慎重に渡っていた子どもたちも慣れると「簡単になってきた」「もっと難しくしたい」と言うので、保育者は「どうしたら難しくなるかな」と問いかけたり、はしごに傾斜をつけたり、巧技台を高くしてそこからジャンプができるようにしたりしながら、様子を見守った。すると、「先生見てて、難しいで」とA児ははしごを後ろ向きに渡った。それを見て次は前向き横向き後ろ向きに回転しながらはしごを渡る子、平均台を腕の力を使ってお腹で滑るように渡る子と、自分の方法で難しさに挑戦する姿があった。



遊びの後の振り返りでは「明日はもっと難しいコースにしたい」と期待をもっていた子どもたちだった。

〈考察〉

- ・「難しいコースをつくりたい」という目的に向かって、友達や保育者と相談、協力しながら運動用具を並べて、「もっと難しくするにはどうしたらいいだろう」と、いろいろな身体の動かし方を考え挑戦しようとする姿があった。子どもたちの思いを実現するために、保育者が別の場所を提案したり「どうしたら難しくなるかな」と問いかけたりしたことで、さらに難しく面白くするためにどうすればいいだろうと、子どもたちが課題を見つけて楽しく挑戦するきっかけとなったと思われる。

〈登り棒に挑戦〉5歳 6月

A児が登り棒に登る姿を「すごいね！」と言って見ていたB児とC児。A児が「練習したら登れたよ」と言ったので、自分達も挑戦したいという気持ちを持って欲しいと思い「一緒に登ってみたら？」と保育者が言うと、「力がないから」「登れないから」と自信のない返事が返ってきた。それを聞いていたA児が「練習したら出来たよ。この棒が登りやすいよ」と6本ある棒のうちの1本を指差して教えてくれた。「じゃあ、私もやってみる！」と挑戦し始めたB児。何回か登って見たが、「1番上まで登れない」と呟いた。それを見ていたA児が「登るのには裸足になって足の指に力を入れて登ればいけるよ」と実際に登り方を見せてくれた。その様子を見て保育者が「今、ここまで登れていたよ。次は今教えて貰ったみたいに足の指にも力を入れるとさっきよりも登れるかもしれないね」と登れた高さまでマスキングテープを貼って知らせた。すると「うん。もう1回登ってみる！」とB児は裸足になって挑戦した。保育者は登れた高さまでマスキングテープを貼りながら「次はここまで来たよ！すごいね！さっきより高い所まで登れたよ！」と励ますと、「やった！」と大成功を遂げたように喜んだ。それを黙って見ていたC児が「私もやりたい！」と靴下を脱ぎ始めたので、

保育者も「うん。やろう！」と声を掛けた。B児と同じように登れた高さにマスキングテープを貼ると、C児が嬉しそうな顔で「Bちゃん。わたしはここ。」と貼ったマスキングテープを指差して知らせていた。B児も「見ていたよ。もうちょっとやってみようよ」と登ることが楽しくなってきた様子で、休憩をしながら何度も交代で登る姿が見られた。次の日も「テープを持っていくね」と準備して、A児が二人の登れた高さにマスキングテープを貼り、それぞれここまで登りたいとい目標を持って再び登り棒に挑戦する姿が見られた。



(考察)

- ・友達が登り棒に登る姿を見ていたB児とC児に保育者は登り棒に挑戦するきっかけになって欲しいと思い声を掛けたことで、友達に登り方を教えてもらい、登り棒に対して自信のない様子だったB児とC児は前向きに挑戦し始めた。
- ・登った高さが視覚的に分かりやすいように保育者がマスキングテープで登った高さを知らせた。そのことによって自分の登れた高さを視覚で知ることができ、「もうちょっとやってみよう」という気持ちが芽生え、意欲的に取り組む事が出来た。

5. 研究の成果

- ・3歳児は、初めてすることや場所に不安を感じたり、友達がしている様子を見てからやってみようとしたりする子どもが多かったが、安心して過ごすことができる環境を整え信頼関係を築くことで、様々な遊びをやってみようとする姿につながった。また、1年を通して室内外で同じ用具を使い、体を動かして遊べる環境を設定したことで、安心して繰り返し体を動かし、やってみようとして挑戦したり、楽しく体を動かしたりするようになった。
- ・4歳児は、3歳児クラスでの体づくり遊びや園生活の経験を基に継続して取り組んできたことで、姿勢を保てる時間が長くなり、保育者や友達の話を聞く姿勢の意識を高めることができた。またサーキット遊びや体を使ったゲーム遊びなど取り入れた後に、一斉活動に取り組む保育の流れを意識したことで、落ち着いて話を聞く姿につながったと思う。体づくりや、話を聞く姿勢を意識することの積み重ねが遊びや友達とのかかわりを深め、心を弾ませるきっかけになるとわかった。
- ・5歳児は、遊びの中で保育者が意図して運動遊びの場を提案したり、意欲を引き出すような問いかけをしたりしたことが、友達と協力しながら「挑戦したい」「もっと難しくしたい」と心を弾ませながら自分たちで遊びをつくっていくきっかけとなった。
遊びの中で身体的な挑戦の過程で、友達に刺激を受けたり励まし合ったり協力したりしながら心も弾ませている様子から、心と体は連動していることがわかった。
このような心も体も弾ませる遊びの経験を積み重ねてきたことで、3学期には、保育者の提案や問いかけがほとんどなくても、自分たちで遊びに必要なものを準備し、高低差を利用して身体を動かしながら遊ぶことを楽しんだり、自分が決めた目標に向かって挑戦したりする姿がみられるようになった。

6. 今後の課題

今後も一人一人の発達状況や発達していく過程を踏まえながら、子ども達が様々な場での体験や遊びの経験を積むことができるように、遊びからの学びを育てる環境づくりや援助を探っていきたい。また、職員が研究の場に参加できるような体制づくりをし、環境への配慮や子ども達への関わり方などにおいて、同じ方向を見据え、共通の思いで子ども達の育ちを支えていけるように努めていきたい。